



▲ 只見方式で整理する町民

# 町史

とっておきの話

237

## 町民が生んだ只見の宝「民具」⑦

### 只見の民具から 世界の民具へ

二〇一三年は「民具」という言葉を生み出した渋沢敬三の没後五〇年にあたり、さまざまな催しが行われました。そもそも民具をはじめ、民芸・民話・民家・民謡・民俗芸能など庶民の生活文化に対する関心は、近代化に対する伝統的文化を再評価する運動として大正末から昭和の初めにかけて現われ、その集積が民俗学として柳田國男によって方向づけられました。言い換えれば、そこには先祖が営々と培ってきた伝統文化や生活の知恵の結晶である事物を簡単に捨て去ってよいのかとの反省が認められます。この背景には、現在を生きる我々はその取捨選択、改良を加え、子孫にいかんにか承継していくのかを問う、過去↓現在↓未来に対する連続性への確固たる信念がありました。

民具は、庶民が生活の必要から製作し、使用してきた日常卑近な道具と狭義には考えられてきました。しかし、製作や使用に庶民の意思が反映されていけば、購入品や工業製品も、さらには荷車や家などの大物や不動のものも常民の物質文化であると広く考えられるようになりました。その一方、民具は「二つの子」、それぞれの「土地」と父祖はじめ家ごとに使われてきた先祖伝来の「血」がしみ込んだ二つとして同じものがない物といえます。

只見町の民具は、国指定の重要有形民俗文化財として知られているだけではありません。おじいちゃん、おばあちゃんが民具を通してかつての生活を孫子に語り残すことを合言葉に自ら集め、写真を撮り、記録カードに記載するという整理・保存・活用方法が只見方式として民具研究者の間で広く知られています。実際に作り、使った本人が記録したのですから学術資料としても一級です。

自然と人々の交渉の結晶ともいえる只見町の民具の持つ現在の意味と、未来に伝える意義をどう考えたらよいのでしょうか。現在、所蔵されている民具の多くは高度経済成長期に不用になったものです。その背後には、農業の機械化、いろいろの消滅に象徴される生活の大きな変化がありました。今日、少子高齢化を迎えた中で、先祖が残してくれた宝物とも言える民具を活かす方策を私なりに一点あげてみます。



▲ 中国民俗学会ホームページで紹介された只見の民具

一つは、高度経済成長から現在までの生産・生活に関する耕運機や電気釜など諸用

神奈川大学教授

佐野 賢治

具の収集、記録化を行い、収蔵されている民具との比較の資料とし、時間軸における連続・非連続の面を考える参考にします。さらに現在の暮らしよりも正確に記録できたらと思います。韓国では、これから百年後に残すために、各地方で一軒の家の生活用具を冷蔵庫や財布の巾着、下着類まで一切合切を記録する事業を国立の民俗博物館が行っています。調査対象となる家の理解と十か月にわたる調査員の現地調査の賜物で、その成果はインターネットで公開されています。

もう一点は、空間軸として只見町の民具を国際的に紹介することです。半年近く雪に閉ざされる只見町もインターネット・エコミュージアムで世界につながります。パソコンは世界につながるいろいろ端です。また、パソコンを扱うことで、じいちゃん、おばあちゃんと孫との交流の場にもなります。只見町と似たヨーロッパアルプスの山村の民具と比較することも夢ではありません。実際、中国民俗学会のホームページには只見町の民具整理の方式が詳しく掲載され、民具をテーマにする大学院生も現れてきています。

現在、只見町の民具を収蔵展示する施設の開設が具体化してきています。只見町には、ブナセンター、河井継之助記念館、会津只見考古館をはじめとするミュージアムがすでにあり、ユネスコエコパークの登録も目前です。自然と人々が共生した理想的なエコミュージアムの姿が目に見え、その目標達成に向けて少しでもお手伝いができたらと思うところです。